

座禅洞だより

■ 岐阜環境医学研究所・座禅洞診療所
 ● 呼吸器疾患・禁煙治療・漢方相談
 診 察 日：月曜・木曜・金曜
 受付時間：9:00~12:00、
 〒502-0017 岐阜市長良雄総878-16
 IP Tel:058-295-9545
 FAX:058-296-3903
 E-mail:zazendoh@ccn.aitai.ne.jp
 http://zazendoh.town-web.net/

174号 2018.9.1.
 毎月1回発行 座禅洞診療所 松井英介



バーチェットは内部被曝に気づいていた

松井 英介

1945年3月10日の東京大空襲。米軍はたった一晩で10万人を殺しました。いかに効率よくひとを焼き殺すか。ナパーム弾はそのために開発した焼夷弾です。米軍は東京大空襲に先立って日本の小さな木造家屋を燃やす実験を繰り返したといわれています。

ナパーム弾の特徴は、身体や着衣につくと1100度もの高温で燃え続け、水をかけても消せないことです。米軍の空襲はどの町でもそうですが、町の周辺部にナパーム弾を落とし、周辺部から町を焼くことによって、逃げ道をふさぎ、避難できない状態にしたのです。

私の家族、弟・尚信4歳と妹・知世も避難途中の広場で逃げ場を失いました。私がナパーム弾の雨の中を海まで逃げお世話したのは、奇跡的だったといえるかもしれません。

ご存知のように、日本敗戦の日は、広島・長崎に原爆が落とされた直後の1945年8月15日です。が、国際的には1945年9月2日とされています。この日、アメリカ戦艦ミズーリ甲板上で、連合国に対する日本国の降伏調印式が行われたからです。この調印式に、世界各国から600人も記者が押し寄せました。

ところが、この調印式の取材より広島の取材を優先させたジャーナリストがいました。イギリスの新聞社デイリー・ニュースの記者W・ピーター・バーチェットです。彼は日本の皇軍が1938年から5年間にわたって計画的に空襲を仕掛けた四川省重慶戦略爆撃の被害を取材するため中国にいました。日本への渡航の途中、沖縄で彼は広島への原爆投下の事実を知りました。東京に着いたバーチェットは、たった一人満員の列車に乗り込み、広島を目指します。

9月3日国際ジャーナリストして誰よりも早く広島に入ったバーチェットは広島で見たままの被害状況を、アメリカ占領軍厳重な規制の眼をかいめぐり、モールス信号を使ってイギリスに送りました。彼の記事は、9月5日付デイリー・ニュース紙の一面全面と次のページの大半を占めたのです。その記事の見出しはつぎのようです。

「原爆疫病。『私は世界への警告として、これを書く』。

医師たちは働きながら倒れる。毒ガスの恐怖—全員マスクをかぶる。

エクスプレス。スタッフ、ピーター・バーチェット記者」

彼が如何に苦労して広島に入ったか、広島での被害状況の取材がどのようになされたか、彼の記事が世界各地でどのように受けとめられたかなどなどをここでお伝えできませんので、彼が1983年8月6日に出版した「広島TODAY」（連合出版）をお読みください。

ただひとつ、お知らせしたいのは、広島の通信病院を訪ねたばかりのこの段階で、それまでのナパーム弾などとは根本的に異なる原爆の内部被曝（呼吸や飲食によって体内に取り込んだ核微粒子による被害）に、バーチェットは気づいていたことです。

彼は書いています。「あの大異変の中で負傷しなかったひとが、原爆病としか表現しえない何ものかのために死んでいくのである（「広島TODAY」P.48）」。